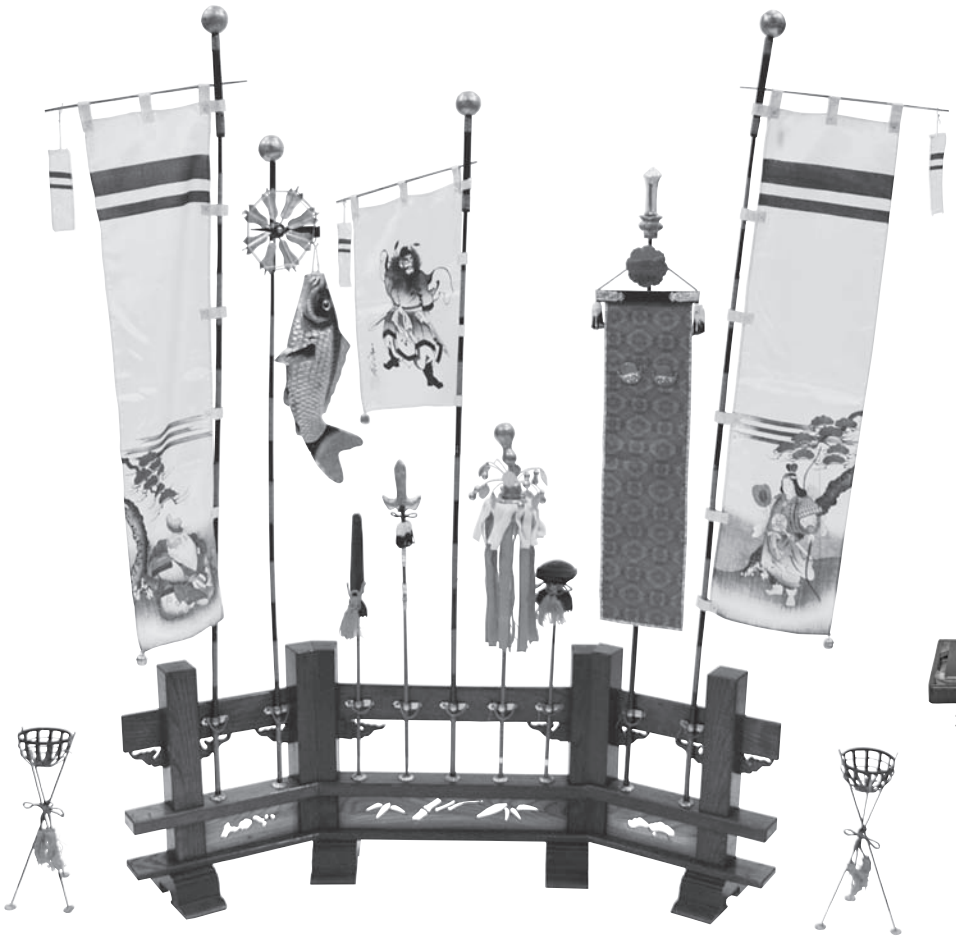
沼津市歴史民俗資料館

資料館だより

Vol.35 No. 4（通巻189号）

2011. 3. 25（年4回発行）



座敷幟とかがり火　昭和 10 年頃（1935）

飾太刀*

武者人形*

神武天皇

鐘馗

金太郎（上２点）*

*の資料は昭和 10 年頃（1935）

寄贈資料の中から　座敷幟（ざしきのぼり）

今回は、端午の節句の室内飾りの一つである、座敷幟を紹介します。座敷幟というのは、小型の幟や槍などを枠に立てた飾りのことです。

幟枠には五、七、九本立などがあり、長幟、四半旗（しはんばた）、立傘（たてがさ）、台傘、十文字槍、千成瓢箪（せんなりびょうたん）、毛槍、鯉幟、吹流しなどを立てます。このうち鯉幟と吹流しは、四本柱の枠に一本ずつ立てて、対で置くこともあります。四半旗とは鐘馗（しょうき）が描かれた幟のことです。鐘馗とは古代中国の伝説に登場する人物で、魔除けの意味があります。

座敷幟の枠の種類には、平枠、屏風枠などがあり、写真の資料は平屏風枠といって、枠の左右を前方へ曲げたものです。その他に、枠に彫刻を施したものもあります。

座敷幟が誕生したのは江戸時代です。初めは戸外に飾る大きな飾りで、江戸初期は家の門口に柵を設置し、兜や薙刀、槍、幟などを立てていました。江戸中期には小型の幟ができ、座敷にも飾るようになりました。台乗りの人形等もこの時期には室内に飾られています。また、江戸後期には戸外に飾る鯉幟が登場しました。

その後、座敷幟が好まれるようになり、外飾りは幟や吹流しを残し、他は飾られなくなりました。それから昭和 30 年代にかけての間、座敷幟は盛んに飾られていましたが、昭和 40 年代以降は鎧や兜飾りが全盛となり、現在では写真のような座敷幟は姿を消しつつあります。

沼津では、昭和 30 年代頃までは、端午の節句には床の間に座敷幟を飾り、共に弓や太刀、鐘馗や金太郎、武者人形などを並べ、お祝いをする光景がみられました。

駿河湾の漁

後藤正光さんの漁話

延縄釣漁の話2

〈クロザメナワ（クロザメ延縄）の道具立て〉

９、10、11月の月夜の晩にメカジキナワ（メカジキ延縄）をし、闇夜の晩にはクロザメナワをした。クロザメナワの道具立ては、１籠につき次の通りである。

ミチナ（幹縄）：280尋（約420m）、アオソ（麻の一種）の太撚り縄。

ヒヨ（枝縄）：ミチナに５～６尋（約８ｍ）の間隔で、ヒヨの枝という長さ１尋（約 1.5m）の縄が付いていて、ここに長さ５尋（7.5m）のセギビヨをつける。

ツリ（釣針）：約 50 個、ヒヨの先に大きなネムリバリをつける。餌に切り身のマイカをつける。

ヤイシ（錘）：３個、自然石に竹の股鉤をつけたもの。

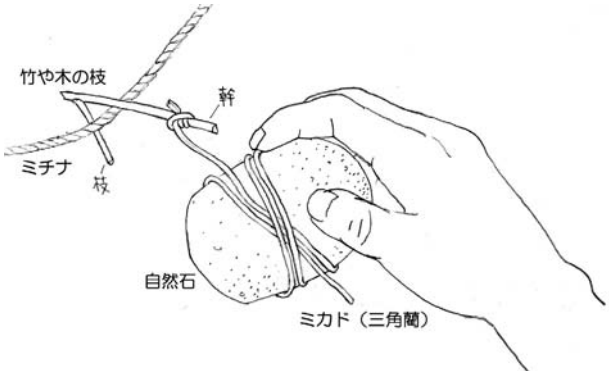
これらを使い、１回の漁に20～30籠つなげて仕掛けた。仕掛けの初めと終わりの２か所にだけ、600ｍの木綿のウケナ（浮縄）と目印のモンゼン（浮標旗）をつけた。また、夜に漁をするので浮標灯を使った。

クロザメは深海魚で、大きくて１ｍ、小さくても60～70㎝ある。身はハンペンの材料になり、肝からは油がとれる。鱗がものすごく強くて、逆向きに触れると手がむけてしまうので、釣れたら甲板へ置かず、すぐにフナグラ（魚槽）へ入れた。鮫肌というが、ナイフみたいな鱗だ。１回の漁で50本釣れることがあり、200貫目（750kg）にもなった。

〈底延縄のヤイシを作る〉

クロザメナワは海底600mに仕掛ける底延縄だが、太く長いナワ（延縄）を沈めるのには時間が掛かる。そこでナワが早く沈むよう、特別にカギのついたヤイシを作って使用した。

昼間に千本浜で、拳くらいの大きさをした形の良い石を拾い、カギには竹などの枝を切った、Ｖ字形の股鉤を作った。狩野川岸でミカド（三角藺）という、軸の断面が三角形で、１ｍほどの長さの草をとり、乾燥させて紐にした。それで縛ると強かった。



カギのついたヤイシ

ミカドの一方をカギに縛り、もう一方を石に縛ると、カギのついたヤイシが出来上がる。ナワを海へ投入しながら、そのカギをミチナのところどころにひっかけてやることで、ナワ全体の沈降を速めた。このカギのついたヤイシを、１回の漁に 100 個ほど作った。

このヤイシはナワが海底に着くと、ひとりでに外れる。海底ではカギが浮き、石は沈み、ナワも徐々に水を含んで沈むので、カギが外れる。それで重たいヤイシを海底に残したまま、ナワを引き上げることができた。こういうカギのついたヤイシを使うナワは、クロザメナワだけだった。

〈ウケダル（浮樽）のこと〉

クロザメナワの長いウケナには、直径２尺（約60cm）、高さ１尺（約 30cm）くらいの、蓋のないウケダルを浮きとして付けた。桶屋を営む焼津の親戚に作ってもらったもので、特別に大きいものだった。

このウケダルの底には小さな穴が開いている。ウケナの上端を穴に通して、樽の内側で結び目をつけ、ウケナが抜けたり水が入ったりしないよう、通したウケナにボロを巻いて太くし、穴をふさいだ。上から続きのウケナを入れ、ウケナの下端が樽の一番上に来る。これにミチナの端と、カギのヤイシよりも少し大きめのヤイシを２個つけて海に投げると、樽が浮いたまま、ウケナがつるつるとひとりでに海へ落ちていく。ウケナが沈むと、海の上に空の樽が浮いている状態になる。このウケダルへ直接ナワの重みがかからないよう、少し離して２尺のガラス玉や桐の浮きをつけておいた。

〈クロザメナワの時間帯〉

夕方に西島町の斉藤冷蔵庫へ行き、預けておいたイカを箱１杯分とって来て餌用に切った。昭和 20 年代には、捕れたイカを餌用に業者に預けて、凍らせておいたものだった。クロザメナワの場合、１尺（約30cm）のイカなら縦に４つに切った。切ったイカをツリに付け、カゴの縁のマキワラ（巻き藁）へ順々に並べて刺したものを、20 ～ 30 籠重ねて船に積んだ。カギのついたヤイシも作って積み、準備を終えてから寝た。

そして夜中の３時頃に起こされて出漁した。４時に漁場に着き、ナワをやって５時。ナワは全長が 8.4 ㎞から 12.6 ㎞にもなるけれど、仕掛けるには１時間もかからない。それから２時間くらい時間待ちをし、７時から引き上げ始めて、お昼過ぎくらいまでかかって上げた。現在のように動力のローラーで上げるのでなく、手作業だった。海底でミチナとつながっているため、１本目のウケナが特に重かった。腕でひっぱっても上がらず、男ふたりが身体全体で引いた。真下にナワが行くよう、船をゆっくり進めながら引き上げた。

（話：後藤正光氏　沼津市我入道在住）

国指定記念講演会（歴民講座）より

受講者からの質問に対する回答　その２

昨年９月26日㈰開催した歴民講座「沼津内浦・静浦及び周辺地域の漁撈用具」国指定記念講演会の中で、受講された方々に、講師の先生方への質問を書いていただきました。前号では、当日ご回答いただけなかった質問に対して、後日、講師の先生方にご回答をいただいた内容を掲載しました。

今号では、以下、当館で回答させていただくのが適当と考えられた４件の質問について、質問と回答を掲載します。（質問番号は前号から継続しています）。

質問 15

沼津市としては、地域の宝として、地域づくりにこれらの民俗資料をどう活かしていこうと考えていますか。

当館回答

静岡県内でも有数の長い海岸線を有するなど、「海とのつながり」を特徴の一つとする沼津市は、歴史的に見ても、人々の日々の暮らしや営みが海との関わりの中で続けられてきたことが、様々な民俗・文献資料から確認することができます。

国指定を受けた漁撈用具は、そうした海と人々との深い結びつきを象徴する「地域の宝」であり、将来に向けて保存・活用を図っていくことが沼津市の使命であると考えています。

特に、市民の皆様には、漁撈用具に対する理解を深めていただくとともに、国指定を受けた漁撈用具の存在が地域・世代共通の話題として定着することにより、地域に対する誇りや愛着が強まる中で、世代間の交流も一層活発になることを期待しています。

今後とも、漁撈用具の展示や今後の調査研究が、地域づくりに寄与できるよう努めてまいります。

質問 16

戦前のイルカ漁で得られた肉は、主にどこで消費されたのですか。

当館回答

足立実氏（元沼津市歴史民俗資料館協議会会長・沼津市口野在住）によると、沼津から伊豆半島が主な消費地であり、甲州・信州（現在の山梨県・長野県）へも多く出荷されたとのことです。

甲州･信州への出荷は、仲買人･小売人の組織であった沼津魚仲間商業組合によって行われ、運搬の経路は、塩を運ぶ「塩の道」と同じであったとのことです。

質問 17

信仰の道具に「愛鷹水神社」の札があったようですが、愛鷹水神社は明治頃にできたと聞きます。既存の信仰から、どういう経緯で置き換わったのでしょうか。

当館回答

愛鷹山水神社の設立の経緯については、沼津市史編さん委員会ほか編『沼津市史 資料編 民俗』（2002年／沼津市発行）に、次のように記されています。

･･･明治初年に寿善院日龍上人によって、日蓮宗の身延山の系統に属する、法華経の修行の道場が開かれている。･･･一般には愛鷹山水神社として知られるものであった。･･･開山の日龍上人は、･･･愛鷹山の奥深く分けいって、水神龍王のおすがたを感じとり、この地に草庵を営んで、修験の行法に励んできたと伝えられる。･･･明治36年には、日龍上人の発願にもとづいて、近郷に勧募をおこなうことにより、あらたに堂舎を建てるにいたった。･･･本堂の正面には、本尊の釈迦仏とともに、･･･日蓮上人の像をも遷して、その左右には、水神および八大龍王の像を祀った。･･･

以上から、日蓮宗系の僧が明治期に開いた修行道場であり、水神と八大龍王を守護神として祀ったことから、水神社と呼ばれるようになったことがうかがえます。したがって、時代的にも宗教的にも、既存の信仰から置き換わってはいないと考えられます。

質問 18

旧清水市から真珠等で来た人との関係は？

当館回答

清水から真珠養殖が伝わった経緯については、『沼津市史 資料編 民俗』に、次のように記されています。

･･･昭和30年代になって重寺定置網仲間の若者たちが、月例の大瀬神社参詣の帰りに船で清水の折戸湾へ遊びに行き、そこで真珠養殖がおこなわれ、志摩から来た娘たちが真珠の核を入れる玉入れの作業をしている光景を見て帰ったことが、重寺への真珠養殖の再導入のきっかけになったと言う。重寺では定置網の不振に伴い、組合員を退いた者などが真珠養殖を昭和33年から始めた。清水の真珠養殖業者の指導を受け、清水からも内浦地区に進出した業者もある。･･･

また、『沼津市歴史民俗資料館だより』72号（1987年）には、次のように記されています。

･･･静岡県内では清水が早く、折戸湾内ですでに戦後まもなく真珠養殖が行われていた。しかし、貯木場が広がり真珠ができなくなり、清水の真珠経営者のほとんどが内浦湾に移ってきた。沼津側からも、熱心に誘致をしたものだった。･･･

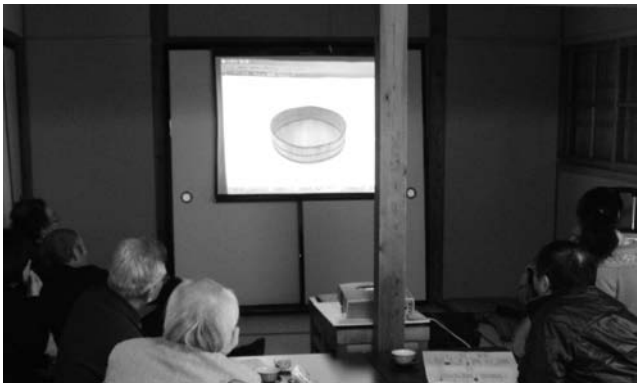
以上から、内浦･西浦地区では、昭和30年代に入り、静岡県内の先進地であった清水の真珠養殖経営者の指導を受けて真珠養殖を始め、一方、清水から内浦・西浦地区に進出した経営者もいたことがわかります。

資料館からのお知らせ

重要有形民俗文化財で研究会を開催

２月 19 日㈯、歴史民俗資料館で全国の大学等で民俗学を研究される方々の集まりである「国際常民文化研究機構」研究会が開催されました。

来館されたのは「民具の名称に関する基礎的研究プロジェクト」委員の皆さんで、沖縄の大学から来沼された方もいらっしゃいました。



資料の説明を聴く参加者

委員の皆さんは、重要有形民俗文化財「沼津内浦・静浦及び周辺地域の漁撈用具」を視察された後、学芸員の説明で資料の呼び方や用途等について、活発に意見交換を行いました。

平成 23 年度事業の概要

沼津市歴史民俗資料館では、平成 23 年度に次の事業を行います。

◎　企画展「(仮)　船上での生活と道具」
　平成 23 年 11 月 3 日(木)(祝 文化の日) ～
　平成 24 年 2 月 26 日(日)

漁船の付属用具（一部）

重要有形民俗文化財の羅針盤、方位磁石、集魚灯・航海灯・水中灯ほか船灯類等「漁船の付属用具」、櫓、櫂、梶、碇等「漁船及び操船用具」、弁当櫃、水樽、羽釜等「魚見・網小屋及び船上の用具」など、普段目にすることが難しい貴重な資料です。この機会に是非「沼津の宝」をご覧下さい。

操船用具（一部）

◎　体験学習 「(仮) 船上で食べるものを作ろう」
　平成 23 年 11 月 13 日(日)

小学校４年生～中学生を対象に、「魚を使ったなます」と「小麦饅頭」を作って試食します。

◎　歴民講座 「(仮) 昔の漁のお話」
　平成 23 年 11 月 27 日(日)

元漁師さんと館学芸員が昔の漁の方法や漁具の使い方等について、シンポジウムを行います。

◎　常設展

駿河湾の漁具コレクション、湿田の農耕生産用具、生活用具とものづくり

資料集 26 を刊行しました

沼津市歴史民俗資料館資料集 26『古文書⒀江梨区有⑷・重須土屋家（西）⑵・小海増田家⑶他文書目録』を刊行しました。

この資料集は、有償（１部500円）でおわけします。詳細は沼津市歴史民俗資料館までお問合せ下さい。

沼津市歴史民俗資料館だより
2011. 3. 25　発行　Vol.35　No.4（通巻189号）
編集･発行　〒 410-0822 沼津市下香貫島郷 2802-1
沼津御用邸記念公園内
沼津市歴史民俗資料館　TEL 055-932-6266
FAX 055-934-2436
URL:http://www.city.numazu.shizuoka.jp/kurashi/sisetu/rekimin/index.htm
E-mail:cul-rekimin@city.numazu.shizuoka.jp

R100
古紙配給率100%再生紙を使用しています